

シュークリームが教えてくれた命の価値

日本講演新聞 中部支局長 山本孝弘

2 5 1 2 2 2

「私は生きています！」「シュークリームを食べて、『おいしい。生きてる価値が見出せた』」というこの言葉に触れ、生きることの尊さを強く感じました。

愛知県江南市にある私立滝高校のハンドボール部は、今日も元気な声を張り上げて練習している。部を指導するのは坂野貴宏先生（53）だ。部員のTシャツには、コミカルだが勇ましさがあるキャラクター「バッサー君」が描かれている。デザインしたのは坂野春香さん。坂野先生の次女だ。

春香さんはコンクールで何度も入賞するほど絵が得意だった。将来は漫画家を目指していた。『×（バツ）くん』（三恵社）という絵本がある。作者は春香さん。こんな話である。×くんの仕事は間違いに×を付けること。だが、×を付けられた人間からは疎まれる。しかしある日、×を付けられた女の子がこう言う。「あっ、まちがえた。でも×は成功の元。×くん、ありがとう」。×くんは元気を取り戻す。『×くん』は、春香さんが右手を使えなくなってから左手で描いた絵本だ。

先日、父・貴宏さんの講演会があり、私も参加して「命の講演」を拝聴した。春香さんに異変が起きたのは小学6年生の時だった。体調がすぐれず学校を休みがちになった。ある夜、頭痛と嘔吐、視力障害が彼女を襲い、救急車で緊急搬送、脳腫瘍と診断された。手術の時間、貴宏さんと妻・和歌子さん、長女・京香さんはただ祈って待った。「腫瘍はすっと綺麗に取れました」医師からそう告げられた3人は歓喜の声を上げ、肩を抱き合って泣いた。しかし、取った腫瘍細胞を病理検査に出したところ、数多（あまた）ある腫瘍の中でも悪性度の高い膠芽腫（こうがしゅ）というものであることが判明した。再発率も高い腫瘍だ。春香さんは一旦院内学級に転校し、院内で勉学に励んだ。その様子を見た貴宏さんはこう感じたと言う。「勉強することは生存証明みたいなもので、それは社会と繋がる一本の命綱のようなものなのかもしれない」

その後、元の学校に戻った春香さんは無事小学校を卒業した。中学校に入ってから、学校で母の手を借りることもあったが、修学旅行は本人の希望で親の同行なしで無事に行くことができた。中学校卒業後は、芸術科がある私立高校に通学。その後体調を考慮し通信制の高校に転入した。その時に回転寿司チェーンでアルバイトを始めた。それも春香さんの生存証明だったのかもしれない。

高3の夏。春香さんは右手の感覚に異常を覚えた。9月に入ると、目の焦点がズレたり、呂律が回りづらくなったりした。診断結果は脳腫瘍の再発だった。手術をするにあたり、6年前とは大きく違うことがあった。一つの選択をせまられたのである。「腫瘍を全部取ると右半身が動かなくなり、言葉も発せられなくなります。少し残せば右半身は動き、言葉も残るかもしれませんが。でも再発して死に至る可能性もあります」そう告げられ、言葉に詰まる両親の前で春香さんは即答した。「私は生きています！」

春香さんは家族に手紙を書いた。「私という自我が死んでしまうかもしれないので手紙を残すことにしました。パパ、ママ、この世に存在させてくれてありがとう。京香、いつも味方をしてくれてありがとう。心から家族が大好きです。不幸とは幸せに気付かないこと」手術は成功した。言葉を失くしはしなかったが、少し遅れて出てくるようになった。その頃から春香さんの映像がたくさん残されている。それは春香さんの希望だ。「絵が描けない代わりに自分の姿を映像に残すことで人に伝えたかったのでは」と和歌子さんは言う。「死にたい」と泣いた後にシュークリームを食べる映像も残っている。「おいしい。生きてる価値が見出せた」と泣きながら呟く春香さんがいた。手術から約1年2か月後、再再発した春香さんは、そっとその命を閉じた。

講演では、春香さんが中学生だった頃に描いた紙芝居を春香さん自身が読んでいた映像が流れた。インド民話の「ひび割れ壺」の話だ。自分に割れ目がある壺は、満タンの水が運べないことを悲しむ。だがその道には花が咲いている。漏れた水が花を咲かせたのだ。この物語に私は坂野さん親子を見た。春香さんの生き様は、春香さんがこの世に撒いた水だ。今、貴宏さんは娘の生き様を伝えることで、新たに春香さんの命を咲かせようとしている。春香さんの生きた姿は映画化され、そのマスコミ試写会に私も参加した。悲しい映画ではない。春香さんが撒いた水が心に沁み込み、私の心にも生きる勇気の花が咲いた。映画『春の香り』は東海3県で令和7年3月7日先行ロードショー。14日から順次全国で公開される。